

## 巻頭言

# 京都大学工学部建築学教室所蔵建築教育資料について

評議員・京都大学大学院教授 高橋康夫

今年創立85周年を迎えた京都大学建築学教室にはその創立時の教育の姿をしのばせる資料が数多く伝えられている。卒業年次の古い人々の思い出には建築学教室本館の廊下に置かれた標本棚や東福寺東司の古柱が、近年の卒業生の記憶には新館一階ロビーの日野法界寺阿弥陀堂の模型があろう。それらは残された膨大な資料群を代表するものの一つである。

これらの標本や模型、図面などのコレクションは、大正9年（1920）の京都帝国大学工学部建築学科の新設に先だつ大正8年（1919）から17年後の昭和11年（1936）にいたる期間、購入や寄付などによって集中的に収集、整備された。いずれも当時最新・最先端の建築学教育を行うための資料・標本であったのであり、大別すると、設計図・建築模型（木製・石膏製）・古建築標本・工芸品・建築装飾品・石膏レリーフ・大理石標本・給排水器具・住宅模型・建具模型・白蟻被害木材および紙などからなる。多種多様、ある意味で雑多なコレクションであるが、そのなかには貴重なもの、有名なものが数多く含まれている。

(1) 「日本建築界の父」ジョサイア・コンドル博士建築設計図（472点）：東京駿河台のニコライ堂（重要文化財）や綱町三井倶楽部などの図面があり、ジョサイア・コンドル博士建築設計図の日本最大・最良のコレクションと評価されている。

(2) 「近代建築の巨匠」フランク・ロイド・ライトの石膏製建築模型3点： 帝国ホテル、米国教会堂、活動写真館の石膏模型がある。とくに帝国ホテルの石膏模型は世界的に注目され、しばしば出品の依頼がある。

(3) 古瓦： 建築史講座教授の天沼俊一の収集によるもので、地域的にも年代的にも広範囲にわたる古瓦のコレクションであり、東京国立博物館には及ばないものの、奈良国立博物館や京都国立博物館よりもよいともいわれる。

その他のもの、たとえば標本棚収蔵の資料群（廃棄すべきとの意見もあった）も、実は専門家の鑑定によってすぐれた価値があることが指摘されている。標本資料を収める棚自体も価値があり、標本と一体的に保存しなければならないとのことであった。

これらの資料群は今、「京都大学工学部建築学教室所蔵建築教育資料」として「登録文化財」への道を歩み始めている。文化財保護法が改正され、今年度から「建造物」に加えて「歴史資料」も登録文化財になりうることになったのであるが、その第1号として登録手続きが進行中である。

望外の結果となったのは、登録のための調査の過程でコンドル博士建築設計図の価値が

きわめて高く評価され、重要文化財としての指定に向けた調査が行われたことである。このまま順調に推移し、審議会の承認なども得られたならば、コンドル博士建築設計図は国の重要文化財になるというのである。建築学科創立時の努力がこのような形で現代における文化的な貢献に結実するのであれば、たいへんありがたいことといわねばならない。